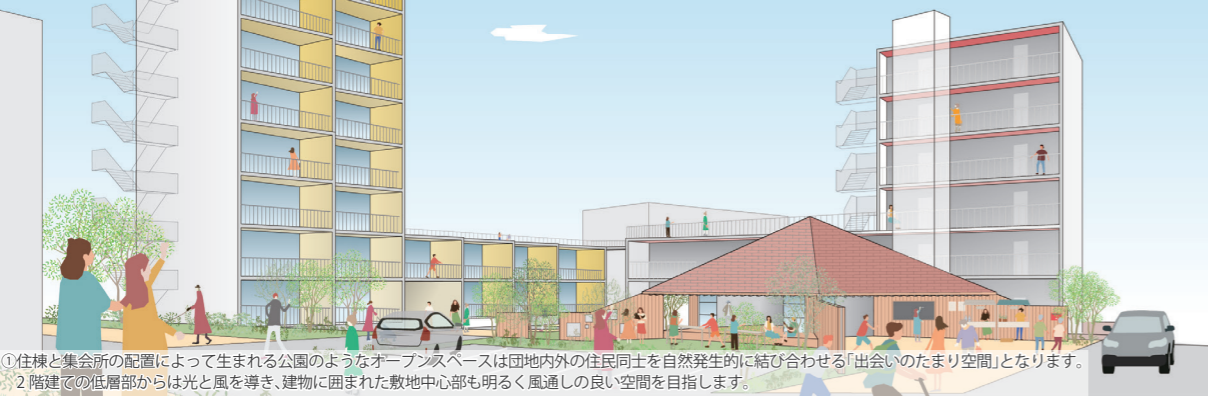


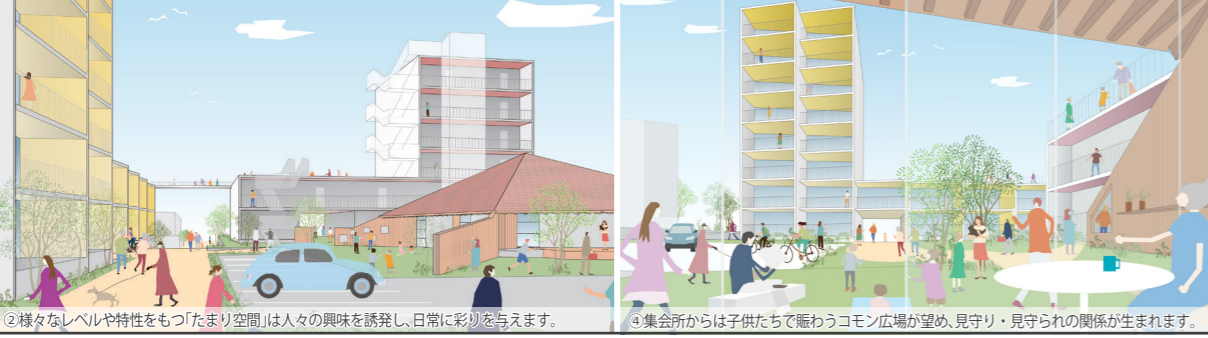
様式 11 評価テーマに対する提案

丘の上のポルティコ

-ヒトが巡り、出会うミチ向ヶ丘団地-



①住棟と集会所の配置によって生まれる公園のようなオープンスペースは団地内外の住民同士を自然発生的に結び合わせる「出会いのたまり空間」となります。

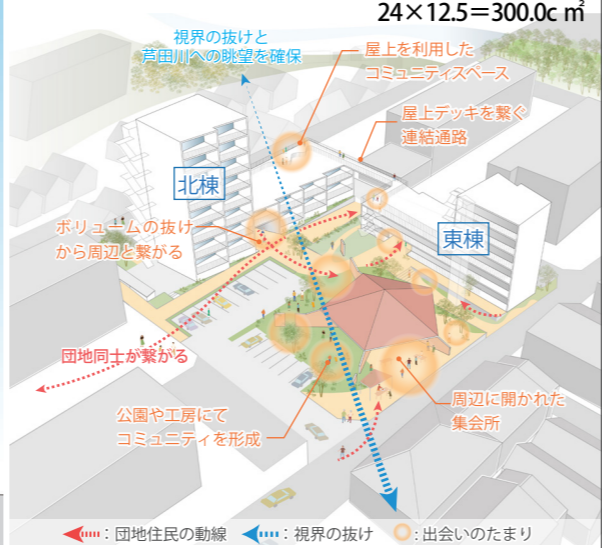


②様々なレベルや特性をもつ「たまり空間」は人々の興味を誘発し、日常に彩りを与えます。

④集会所からは子供たちが賑わうコモン広場が望め、見守り・見守られの関係が生まれます。

③屋上連結通路では夏の火花を鑑賞したり、日常と非日常が混在する憩いの場となります。

新たに生まれ変わる向ヶ丘団地によってつくりだされた「ミチ」と「たまり」は日常の何気ない一場面が重なり合い、世帯や世代を超えた出会いや交流が生まれる新たな風景を創造します。仕事へと足早に出かけるひと、散歩途中に腰掛け談笑する高齢者や学校から帰ってきて遊ぶ子供たち、そのような当たり前の日常に、「巡る・眺める・出会う・憩う」といった要素を加えることで、人々にとって心の拠り所となる居場所として、まちに誇れるシンボルとして親しまれ続ける向ヶ丘団地を目指します。



②様々なレベルや特性をもつ「たまり空間」は人々の興味を誘発し、日常に彩りを与えます。

④集会所からは子供たちが賑わうコモン広場が望め、見守り・見守られの関係が生まれます。

③屋上連結通路では夏の火花を鑑賞したり、日常と非日常が混在する憩いの場となります。

テーマ 1 「様々な世帯に対応した良好な住環境」について

地域の新たなシンボルをつくる

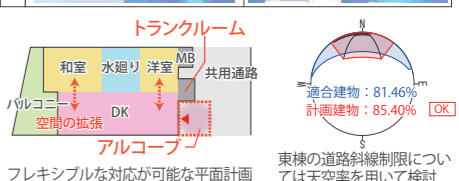
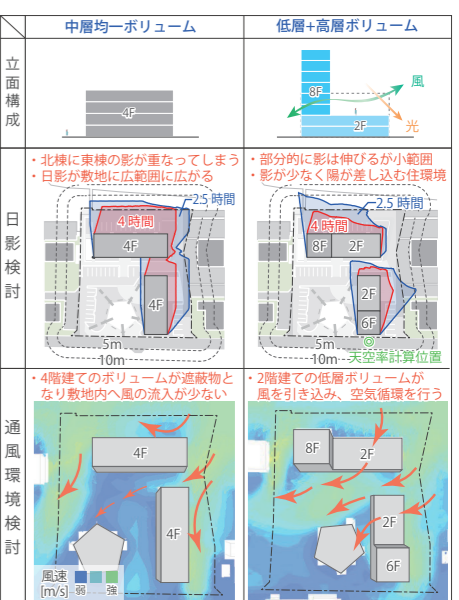
周辺の山並みや学校、住宅街に呼応するような高低差のあるボリュームで住棟を構成します。地域の新たなシンボルとなる塔状の住棟と低層の住棟の組合せによって、圧迫感と日影を軽減し、団地内外に良好な住環境の提供と周辺環境へ調和した新たなスカイラインを描きます。さらに、均等配置された既存住棟に対し、個性と変化を与え、同時に、向ヶ丘に新たな風景をつくりだします。均質な一体ボリュームに比べ、高低差のあるボリュームとすることで、風の抜けが生まれ、敷地内の空気循環と敷地中央部や周辺環境へ良好な通風が確保できます。また、低層部分の屋上同士を連結通路で接続することで、一体的なコミュニティの形成を目指します。日常動線としての活用と共に、眼下に広がる水呑の風景を眺める、夏には芦田川の火花を鑑賞するといった住民が集う憩いの場を提案します。

コミュニティを推進する公園のようなオープンスペース

敷地のレベル差と団地内通路の位置関係は、基本的に既存をそのまま活かして建築や外構計画で解消することで、余分な切土盛土をなくし、コスト削減に寄与します。車道と駐車場は外周部にまとめて計画し、その内側は団地に住む人たちの相互連関を促すようなL型の住棟配置とします。敷地中央あたりに配置した集会所や広場は日常生活の中に溶け込み、団地内外の住民同士を自然発生的に結び合わせる「出会いのたまり空間」となると共に、住人同士の「見る・見られるの関係性」を築き、住民間の見守りやコミュニティの活性化を促進させます。また、集会所の形態を活かし生まれる外部の様々な賑わい空間は、各住棟と集会所の間の適度なバッファゾーンにもなります。

フレキシブルな住戸プラン

各住戸の玄関前にアルコーブを設け、日常的なコミュニティを形成する小さなたまり空間やベビーカー・シルバーカー置き場といったプライベート空間として機能します。住戸プランは個室がDKに隣接する配置とし多様なニーズやライフスタイルの変化に柔軟に対応可能です。さらにバルコニーは斜めに角度をふることで、物干し以外の用途に活用でき、DKと一体的な利用も可能とします。



テーマ 2 「実現性の高いコストの縮減策」について

壁式構造によるコンクリート量と施工面積の縮減

豊富な経験と構造の知識を活かし、構造形式は高層部(6、8階建て)も含め全て壁式構造を採用します。ラーメン構造と比べ室内に梁型が出てこず、各階の階高を100mm程度低くできます。そのため、コンクリート量は1割程度、鉄筋量は2割程度の削減が可能であり、型枠の加工や施工手間、仕上げ面積も縮減できます。工期短縮によるコスト縮減 積極的に建物を軽量化し、鋼管杭とすることで、工期短縮と残土を削減します。また、壁式構造の凹凸が少ない躯体は、自由度の高い室内計画とつくりやすい平面形状を実現すると共に、工期短縮と人件費削減に寄与します。

既存を利用した最小限設備

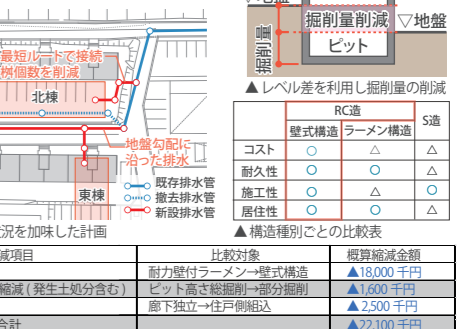
既存の埋設配管を避けた住棟配置とすることで、既存排水管を極力残しながら、管路更生工法により老朽化した配管の有効利用を検討します。この工法は非開削工事となるため、掘削工事を最小限に抑えることができます。

敷地の高低差を利用したピットの計画

もともと敷地がもっている高低差を利用し、地下ピットの掘削量を軽減します。また、建屋下のピットを排水経路として利用し、汚水主管へ最短ルートで繋げ、地中埋設に伴う掘削量の削減と排水樹の削減を行います。

無駄のない住戸計画

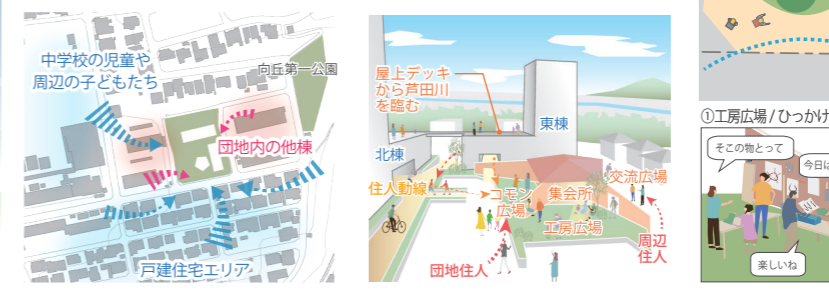
トランクルームを住戸と合わせて計画することで躯体費の削減します。将来を見越した素材の選定 今後のメンテナンスを見越した高効率設備機器の選定や防水・断熱性の高い材料の選定について検討し、ランニングコストの軽減を図ります。



テーマ 3 「集会所を核としたコミュニティの形成」について

まちを結ぶ集会所と多様な活動を誘発する広場

前面道路や各住棟どこからでも視認性が高い、「まちの中心」に配置した集会所は、5枚の壁により性格の異なる外部空間をつくります。南側は周辺住民や登下校の学生が気軽に立ち寄れるような「交流広場」とします。イベントの開催や災害時の避難場所としても機能し地域の拠り所となります。一方、北側・東側は団地内のプライベートと集会所のパブリックを介する「コモン広場」とします。居住者たちに見守られた安全で安心な遊び場、大屋根の軒下で生まれる何気ない団らん、といったみんなの広場が日常の一部に溶け込むような場所です。日常的に集会所や広場に集まったり、自然と目を向けるようになることで、住民間の見守りにも繋がります。西側はDIYや芸術、工芸教室など趣味や興味を持った人が自然発生的に集い、活動する「工房広場」とします。このように様々な「居場所」を自ら見つけ、愛着のある場所となることを目指します。



特に重視する設計の配慮事項

デジタル技術により住民と建物を見守り管理する

・日常の異変に住人が早期発見できる防犯・見守りシステムを構築するため、センシング技術や緊急通報装置といったデジタル技術を導入を検討します。さらに、単身高齢者や子供も安心して暮らせる、世代と世帯を超えたコミュニティが生まれる空間を計画し、団地全体で見守る・見守られる関係性を構築します。・BIMを活用し資材数量等を把握、プランとコストのバランスを考慮した設計、発注者や施工者との共有ツールとして活用するとともに、構造と設備の干渉箇所の確認や建物性能の向上検討、長期的な保守管理への活用を図ります。・集会所に設置したモニターに太陽光発電設備によって得られた電力や消費電力を表示し「電力の見える化」を図ることで、大人から子供まで環境へ配慮する意識や知識の向上を目指します。得られた電力は集会所での活動や災害時に使用し、利用者が電力の活用を意識して管理する仕組みとします。

団地内コミュニティ空間を利用していくための仕組みづくり

コミュニティデザイナーを入れた住民ワークショップの開催により、計画段階から居住者の意見を聞き、取り入れると共に、早い段階から計画及び工事に関する関心と理解を持ってもらうことで、スムーズな移転が行えます。また、周辺住民を含めた地域のワークショップも開催し、集会所の活用方法やルールを考える場を設けます。

先を見越した検討と着実なコスト管理

設計と並行して概算見積を行い、各段階に応じたコストチェックを実施することで、建設コスト変動へ柔軟に対応します。さらにZEH基準への対応や太陽光発電の検討などコスト増減に大きく関わる内容へ早期に着手し、適切な選択肢の検討を行います。

